

# “地域貢献力” 養成プログラムの開発

塩野谷齊\*・小林陽子\*・土井康作\*

## Development of a Program to Train Students' Ability to Contribute to Local Regions

SHIONOYA Hitoshi, KOBAYASHI Yoko, DOI Kosaku

キーワード：地域貢献, ボランティア, ものづくり

Key Words: regional contribution, volunteer, handicrafts

### I. はじめに

学生たちの間で、ボランティア活動に対する関心が高い。もちろんすべての学生がそうだというわけではないが、ボランティアサークルの活動は盛んであるし、教員が何らかのイベントに誘ったとき、乗り気になる学生は少なくない。すなわち、大学の授業を離れた身近な地域貢献活動に対する興味関心が存在するわけで、特に教育系の学生であれば、子どもを相手とするものに惹かれる様子が窺える。

一方、そのような高い関心の背景には、中学・高校時代の職場体験、具体的には、保育園で実習したときに子どもに慕われたという心地よい思い出をもつ学生の存在も少なからずあろう。将来の職業選択との関係、例えば教職志望の学生であれば今のうちから子どもと接する機会を持っておきたいとの希望もあろう。もしかしたら、一時期若者たちがそう評されたように、いわゆる“優しさ志向”のようなものがあって、見返りを期待しない無償の活動を行う中で自分探しを行う者もあるのかもしれない。

さらにいえば、教職希望者の間では、ボランティア経験が就職に有利に働くとの判断もあり得る。文部科学省は平成8年（当時文部省）、教育助成局長通知『教員採用等の改善について』（文教地170号）の中で、「スポーツ活動、文化活動、ボランティア活動や大学等における諸活動の実績などを評価する選考方法の改善を一層進めるとともに、その有効な評価の在り方を一層改善すること」としている。

実際に、文部科学省初等中等教育局教職員課『教員採用の改善に係る取組事例』（平成16年7月）によれば、「ボランティア活動やクラブ活動の実績について、志願書に記載させている、あるいは面接で聴取している区市」（平成16年度）が57区市（前年度55区市）存在する。このような傾向は他の職種にも及ぶことから、教職希望者に限らず目敏い学生の中には「就職に有利だから」との理

---

\* 鳥取大学地域学部地域教育学科

由で、ボランティア活動の実績作りを行う者もいるほどである。

ここで生じる心配は、動機がどうであれ、そのボランティア活動が真に相手のためになっているのかということである。就職を見据えての活動であることも、活動する者自身の“癒し”であることも一概にマイナス評価はできないが、それが単なる自己満足で終わってはなるまい。一例をあげれば、近年主婦層などに流行の感すらある絵本の読み聞かせボランティアに至っては、行う者の一方的な思い入れの強さを懸念して、「気を付けよう、暗い夜道とボランティア」などと揶揄する児童文学者すらいる現状がある。

これから社会に巣立つ学生もまた、地域社会にあって、ボランティア活動の担い手としての貢献を行い得るものである。しかし、行う者の自己満足に陥ることなく真にその役割を果たすためには相応の準備が必要であると考えられる。

## 1. 目的

ここでは特に、地域の子どもたちの成長発達を支援する学生ボランティア活動に注目し、それを有効ならしめる前提として、学生たちが人と関わり真に地域貢献し得る力、“地域貢献力”を身に付けるための具体的なプログラム開発の基礎的資料を実践的に集積することを目的とする。

本研究では、社会経験の十分でない学生を対象とすることから、人とコミュニケーションするきっかけ、手段として、具体的にものを介することを重視した。同時に、本研究の過程それ自体が実践的営みであることから、副産物として、学生自身の成長や地域における本学のイメージアップにも寄与できるものと考えた。すなわち、まとめれば、目的として次のことが設定できた。

- ・学生たちが自主的に子どもと関われる力、例えば、企画力や指導力、遊び演じる力等を高める。
- ・ものを介して子どもと関わる経験を積み重ねることにより、学生たちが人とコミュニケーションを図る際の具体的なやり方を体得する。
- ・学校や公民館等において子どもと関わるために、ものづくりなど教育内容面でのトレーニングを行うことにより、教職希望の学生の資質が向上する。
- ・以上のことを可能にする条件を実践的に探り、集積された事例をモデル化することにより、“地域貢献力”養成のためのさらに普遍的な教育プログラムの開発を行う。
- ・地域において学生たちが子どもと関わる機会を重ねることにより、地域社会における本学のイメージ向上に寄与する。

## 2. 方法

本研究は鳥取大学地域貢献支援事業費の交付決定(平成17年8月10日)から準備に入ったが、あくまでも教員スタッフ(地域学部地域教育学科学習科学講座生活能力論分野、土井康作教授、塩野谷齊助教授、小林陽子講師)が直接的な対象とするのは学生であることから、具体的な取り組みは夏期休暇明け、すなわち後期日程開始を待たねばならなかった。しかし、そこから新たに学生の参加者を募ることは、その後の活動展開における時間的制約から必ずしも容易でないと判断した。

そこで、対象学生は、土井が担当し塩野谷も関わる平成17年度後期・全学共通科目「子どもの生活とものづくりⅡ」(主題科目C・教育学)受講者を中心とすることとした。そして、具体的なものづくりのトレーニングと、そこで身につけたスキルをボランティアとして生かすために、授業の一環としてポリテクセンター鳥取における技能祭(11月6日)に参加して、実地に子どもたちにもものづくりの楽しさを伝える活動を行うこととした。

授業に関しては、まず技能祭で使えるものづくりの技能習得を目指し、教員側が指定した内容をひと通り学生全員で、あるいはグループに分かれて体験学習することとした。そして、学生の希望により技能祭当日の担当グループ分けを行い、会場の案内看板などの製作も進めていった。準備時間が足りない分については放課後に活動することとしたが、技能祭前は熱心な取り組みが認められた。その過程で、個別の学生の学びの実態を明らかにする意図から、授業終了後毎回レポート提出を求め、分析を行うこととした。

結果として、学生の自由記述によるレポートは膨大な量となり、詳細な分析は難しいものとなった。しかしながら、本研究の柱であるものづくりを通じたボランティア活動、すなわち、地域貢献力を学生たちが具体的に高めていく姿を明らかにする基礎資料として有効であると判断できた。

技能祭についても、当日の様子をビデオカメラとデジタルカメラで映像に記録するとともに、後から感想レポートを求め、アンケート調査を行った。これらは、事前準備を行った上で実際に活動を行うことによって、ボランティア活動がより深みを増すことを明らかにするための資料になると考えたからである。アンケート結果については、定量的な分析が可能となり、レポートについてはむしろ定性的なデータとなるものと期待してのことである。

一方、学生のボランティア活動に関して先進的な他大学を訪問し、ヒアリング調査と参考資料の収集を行った。先進事例に学び、本研究における取り組みを相対化する視点の必要性を認めてのことである。具体的には、高梁学園ボランティアセンター・吉備国際大学社会福祉学部福祉ボランティア学科（岡山県高梁市）において聞き取り調査を行った。合わせて、ボランティア受入側である高梁市商工会議所の関係者からの聞き取りも、予備的に行うことができた。

吉備国際大学においては、当該学科としてはボランティアそのものというより、それをコーディネートできる人材養成を図っており、本研究の取り組みとは目的が異なる。しかし、国内外において学生のボランティア経験を応援し、身近なところでは、商店街の空き店舗を活用した手作り遊び教室、森林ボランティア、学内でのノートテイクなど、盛んなボランティア活動が行われる大学から、参考となる事例を学ぶこととした。

### 3. 実践

本研究における実践的取り組みは、主に2つに分かれる。授業「子どもの生活とものづくりⅡ」におけるものづくりのスキル獲得を目指した活動と、その成果を実地に生かす場としての技能祭での活動である。どちらも写真撮影を行うと同時に、学生たちに対しては自らの学びの様子をレポートにまとめるよう求め、合わせてアンケート調査を行い分析した。

#### (1) 授業における実践

「子どもの生活とものづくりⅡ」における授業の流れは、後に示す通りである。実際のものづくり指導には、特に金属加工を中心に工学部ものづくり教育実践センター・長島正明助手が参加した。また、例年の授業計画に倣い、途中2回ほど生涯教育総合センター・西田英樹教授の指導による竹とんぼづくりが入っている。この時間外でも、学生たちは技術棟を訪れ、ものづくり体験を進め、後述する技能祭に向けての準備を進めていった。受講者は、本学4学部のすべてに渡り、工学部1～2年生を中心に約40名であった。

まず第1回オリエンテーションにおいて、本授業では実際に金属加工などのものづくりを体験し、技能祭に参加して子どもへの指導援助を行う旨を伝えた。そして以後、順次、ときには全員一斉に、ときには3グループに分かれて、ものづくりを体験することとした。最後の数回は全体のまとめの

意味で、技能祭の反省会と子どものものづくりの必要性などに関する講義を行った。場所は、共通教育棟352講義室のほか随時技術棟木材加工室、工学部ものづくり教育実践センターを使用した。

なお、学生たちがものづくりの体験をした製作物は、シュート棒、スーパーボール、マジックスクリーン、ペープサート、シャボン玉(以上、紙工作)、キーホルダー、ひものネクタイ(以上、金属加工)、写真立て(木材加工)の8種である。学生が子どもと向き合う際に容易にできる工夫の一例として「できました表」を教員より配付し、1つの製作が終わるたびにゴム印を押すこととした。そして、毎回授業終了後には、感想などのレポートをメールにより提出することとし、学びの様子を分析するための資料とした。

- 第1回 オリエンテーション、シュート棒づくり(全員)
- 第2回 スーパーボールづくり(全員)、マジックスクリーン・ペープサート・シャボン玉づくり(グループ)
- 第3回 前回の続き
- 第4回 前回の続き
- 第5回 キーホルダーづくり(全員)、ひものネクタイ・写真立て・ペープサートづくり(グループ)
- 第6回 前回の続き
- 第7回 技能祭への参加
- 第8回 竹とんぼづくり(全員)
- 第9回 前回の続き
- 第10回 技能祭の反省
- 第11回 講義「光る泥だんご」
- 第12回 講義「ものづくりの必要性」
- 第13回 前回の続き

## (2) 技能祭における実践

技能祭は、毎年、独立行政法人雇用・能力開発機構ポリテクセンター鳥取において行われているイベントである。大工、調理師、和菓子職人などが県内から一堂に会し、地域の人びとを集めてその技能・職人技を披露するものである。2005年度の第21回技能祭は、11月6日(日)、本学のほか鳥取環境大学なども参加して、子ども向けにもものづくりやイベントのコーナーを設けた。あいにくの雨模様ではあったが、数百人から数千人規模のにぎやかな催しとなった。

上述の授業実践に関わった3名の教員スタッフのほか小林陽子講師が学生指導に加わり、学生たちは本学に7時半に集合してバス2台で会場へ移動した。一行には教育地域科学部・工学部のボランティア学生が数名加わり、ものづくりや会場整理の役割分担をともにした。すなわち、教員スタッフは4名、参加学生は約40名となった。一方、本企画への来場者は地域の子どもの大人約500名であった。

会場においては、ポリテクセンター側が作業台など施設設備や電気使用、さらに移動のための交通手段の一部と昼食の提供を行った。本学側は、予め決めておいた役割分担に基づいて学生たちが各製作ブースに分かれ、さらに教育地域科学部技術教育専攻学生たちによるボールペンづくり(木材加工)を加え合計9つのブースで、ほぼ午前中、地域の子どもの大人が実地にもものづくりを楽しむ援助を行った。その際、事前に準備した『ものづくりの手引き書』の配付を行い、来場者の理解

の助けとした。

来場者は、会場入口から入り、それぞれ気に入ったブースを選んで、担当学生の指導援助の下、ものづくりを楽しみ、時間の許す限り各ブースを回ってものづくり体験を行っていった。幼児から小学生が多かったが、大人も保護者のみでなく、子連れでない年輩の人びとも少なからず見られた。ちなみに、ほぼ確認できたブースごとの来場者は、次の通りであった。

キーホルダー	80人
ひものネクタイ	30人
スーパーボール	160人
シャボン玉	30人
マジックスクリーン	20人
シュート棒	30人
写真立て	38人
ペープサート	15人
ボールペン	40人

ブースにより人数にばらつきが見られるが、この点については、製作の難易、同時に体験できる人数の限度などのほか、会場内でのブースの配置状況の影響もあったものと思われる。しかしながら、むしろそのような状況の中から学生自身の工夫が見られた。例えば、当初人が集まらなかった奥のペープサートでは、実演会場を目立つ場所に再配置し、呼び込みを行うなどしており、後半は人集めにおいて相応の効果が認められる状況となった。

全体に子どもを中心とした来場者に対する学生たちの関わりには積極性が認められたが、この点に関しては、後のレポートやアンケート調査の回答内容などによって実態を知ることができる。また、授業において実地にもものづくりを習得し、作り方の手順を『手引き書』にまとめたことで、来場者への説明が容易になったものと思われる。しかし一方、現実的な子どもとの関わりにおいては、多少の戸惑いも認められ、学生自身による反省材料となった。なお、当日の様子は、取材を受け、平成17年11月10日付朝日新聞に報道されている。

## Ⅱ. 吉備国際大学における調査報告

本プロジェクトの目的は「地域の子どもの成長発達を支援する学生ボランティアを組織し、学生たちが人と関わり、地域貢献し得る力を高めるプログラムを開発する」ことである。前述したように、実際の活動としては、学生たちが子どもと関わる手段としてのモノの製作・利用を重視し、ものづくりや絵本の読み聞かせなどの指導援助にあたった。こうした活動のなかから、学生の自主的なボランティア組織形成を支援し、モノを介して地域の子どもの関わる経験から集積された事例をモデル化することにより、“地域貢献力”養成のための普遍的な教育プログラムの開発を目指したのである。

しかし本プロジェクトの推進にあたっては、授業とリンクさせたことにより、形式的には学生たちの純粋なボランティア活動そのものとは言い難いものであった。ここではその点への配慮も込めて、学生たちの自主的なボランティア組織形成を支援する施策を検討するために、先進事例を視察・

ヒアリング調査した結果を報告する。

## 1. 調査の概要

### (1) 調査目的

鳥取大学における学生たちの自主的なボランティア組織形成を支援するための施策を、先進事例から検討すること。

### (2) 調査対象

調査の対象は、「吉備国際大学社会福祉学部福祉ボランティア学科」と「吉備国際大学ボランティアセンター」である。

岡山県高梁市に位置する吉備国際大学は、2000（平成12）年度より同大学社会福祉学部のなかに全国的にも例をみないユニークな「福祉ボランティア学科」（以下「ボランティア学科」とする）を新設させた。ボランティア学科の目指す方向は「福祉や国際協力の現場で働く専門職としての心構えや知識、技術を学び、さらにボランティアとの協働の方法を習得し、自らも実践することのできる人材を養成すること」であり<sup>1)</sup>、ボランティアをコーディネートできる人材を育成している。

また、「吉備国際大学ボランティアセンター」（以下「センター」とする）は、県内最初の大学ボランティアセンターとして誕生し、大学におけるボランティアセンターのひとつのあり方を提起している。「センター」は、2001（平成13）年9月に「ボランティアに関わる学術的研究及び学生のボランティア活動への支援を目的に開設」された「高梁学園ボランティアセンター」の下部組織である<sup>2)</sup>。

「ボランティア学科」、「センター」ともにボランティア組織形成を支援するための先進事例として学ぶべき点が多いと考えられる。

### (3) 調査方法とその内容

調査方法はヒアリング調査である。「ボランティア学科」では学科長の周藤泰之氏、塚田健二氏、「センター」からボランティアセンター事務長代理の仲村正彦氏の3氏、「センター」では同じく仲村正彦氏、ボランティアコーディネーターの小嶋百恵氏の2氏にそれぞれヒアリング調査した。

調査内容の概要は以下の5項目である。

- ① 「ボランティア学科」でボランティアをコーディネートする人材養成を企図した理由（社会的背景、ニーズなど）。
- ② 人材養成のためのカリキュラムなど（教育環境の整備状況、中核的な授業科目の授業テキスト、実習のあり方、指導体制《スタッフ》など）。
- ③ 学生の様子、学習状況（入学してくる学生の意識、学生の授業評価、学年進行のなかでの学生の意識の変化、ボランティア活動との関わりなど）。
- ④ 学生の進路（学生の就職状況）。
- ⑤ 地域との関わり（地域における民間人に対するボランティア意識の向上に向けた取り組み）。

### (4) 調査期日

2005（平成17）年11月24日

## 2. 吉備国際大学社会福祉学部福祉ボランティア学科

### (1) 「ボランティア学科」誕生の社会的背景

1995（平成7）年に発生した阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」といわれるように、被災

地でのボランティア活動に対する認識を飛躍的に高め、同時にボランティアコーディネートの必要性を浮上させた。このボランティアコーディネートを担うのがボランティアコーディネーターであり、「市民のボランティア活動を支援し、その実際の活動においてボランティアならではの力が発揮できるよう、市民と市民または組織をつないだり、組織内での調整を行うスタッフ」のことをいう<sup>3)</sup>。

また2002（平成14）年7月に中央教育審議会は「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」答申において、「国民の奉仕活動・体験活動を推進する社会的仕組みの整備」にて「コーディネーターの養成・確保」をあげた<sup>4)</sup>。これを受けて、行政機関や教育現場などに対して、ボランティア活動の専門職であるボランティアコーディネーターの配置を積極的に推進する方針が打ち出された。

このようなボランティアに対する認識とそのコーディネートの必要が高まるなか、吉備国際大学においても多くの学生がボランティア活動に参加し、彼らの貴重な体験と反省のなかから「ボランティア学科」は誕生した。

## （2）人材養成のためのカリキュラム

「ボランティア学科」は学科が完成し、第1期生を社会に送り出した後、そのカリキュラムを大幅に変更した（表1）。基本的には全体を基礎科目と専門教育科目に分け、理論的・学問的なものから実践的なものまで配している。変更点のなかで特に注目すべき点は、1年次の必修科目「福祉・ボランティア・国際協力入門ゼミナール」と3年次の選択科目「ボランティア活動演習」である。オムニバス方式で行う「福祉・ボランティア・国際協力入門ゼミナール」は、「ボランティア学科」の主たる分野である社会福祉・ボランティア・国際協力を学ぼうとする1年生に対する導入的科目である。各分野に対する興味と関心を深めさせようとするもので、学生を3グループに分け、各グループに対して6名の教員が講義や演習を行う。1年次で「ボランティア学科」における学問や研究と将来の方向性を見出していけるよう、学生のモチベーションを高めるのが目的である。

「ボランティア活動演習」ではサービス・ラーニングを取り入れている。サービス・ラーニングとは学生の自発的な意志に基づいて、一定期間、社会貢献活動（サービス活動）を体験することによって、大学などで学んだ知識を実際の体験に応用し、また実際の体験から生きた知識を学ぶ、いわば、社会貢献活動と大学教育を融合させた新しい教育プログラムである。サービス・ラーニングのプロセスをとおして、教室で与えられる知識では得られないコミュニケーションの力や、学際的・総合的な知識と社会に対する責任・見方・判断力などを身につけることが目的である。4単位通年の授業は、①事前学習②社会貢献活動③事後学習（リフレクション）より構成される。①では社会貢献活動を開始するにあたり、ボランティア活動に関する基礎知識、様々な活動領域や課題などを学ぶ。そこから、各自の活動目標を設定し、活動計画をたてる。②の活動期間は実働90時間以上とし、活動先は2領域に大別されている。ひとつはアジア医師連絡協議会（AMDA：Association of Medical Doctors of Asia）などの国内における活動をする国際協力ラーニングであり、もうひとつは福祉施設、手づくり遊び教室、ノートテイク、ボランティアセンターなどのコミュニティ・サービス・ラーニングである。③では社会貢献活動での反省や学びを教室での討議をとおして学生全員で共有する。また、報告書を作成し、報告会によって学びを発表することとしている。

これ以外にも様々な取り組みがカリキュラムに反映されている。たとえば「コーディネーター論」は複雑な情報を整理し、各種団体や個人をとりもち調整するコーディネーターを養成するために、コーディネーターの社会的役割や実際の活動について学ぶ授業である。「ボランティア情報」はイ

表1. 福祉ボランティア学科カリキュラム (専門教育科目)

分野別	授業科目	単位数	履修年次
基礎	◎福祉・ボランティア・国際協力入門ゼミナール	4	1
	◎社会福祉原論	4	1
	ソーシャルワーカー論	4	2
理論	人間発達学	4	1
	老人福祉論	4	2
	障害者福祉論	4	2
	児童福祉論	4	2
	社会保障論	4	3
	公的扶助論	2	3
	NPOマネジメント	2	4
	災害緊急援助論	2	3
	市民社会論	4	3
	コーディネータ論	2	4
	◎ボランティア論	4	2
	ボランティア活動演習	4	3
	医学一般	4	1
	介護概論	2	3
	社会福祉特論	4	4
	地域福祉論	4	3
	居住福祉論	2	2
	家族福祉論	2	4
	社会福祉法制	4	3
	医療ソーシャルワーク論	4	4
	ケアマネジメント論	2	3
ボランティア情報	2	1	
技術	◎社会福祉援助技術論A	4	2
	社会福祉援助技術論B	4	3
	レクリエーション論	2	1
	レクリエーション指導法	2	2
	臨床心理学	4	2
国際	国際ボランティア論	4	3
	国際保健論	4	2
	国際社会福祉論	4	2
	国際人道援助計画論	2	3
	国際保健・福祉教育事例研究	4	4
	社会開発論	4	4
	国際地域研究Ⅰ (東南アジア)	2	4
	国際地域研究Ⅱ (中東)	2	4
	国際法Ⅰ	2	3
国際法Ⅱ	2	3	
関連	比較民族学	4	2
	情報処理演習	2	2
	福祉科教育法Ⅰ	2	3
	福祉科教育法Ⅱ	2	3
	社会教育学	2	1
総合	外書講読	2	3
	国際協力実習	2	3
	社会福祉援助技術現場実習	4	3.4
	社会福祉援助技術現場実習指導	2	3.4
	◎社会福祉援助技術演習	4	3.4
	◎演習Ⅰ	2	3
	◎演習Ⅱ	2	4
◎卒業論文	4	4	

◎は必修科目を示す。

出典：吉備国際大学編刊『2005年度学生便覧』77～78頁。



インターネットの拡大により、より多くの人々に多様なボランティア活動情報を伝えることが可能になったことから、全授業をインターネットで行っている。また「国際協力実習」は、インドまたはタイのソーシャルワーク施設やNGO機関でボランティアをしながら地域住民とふれあい、国際協力を考える実習である。語学研修、ボランティア研修をしたうえで、夏休みに2週間の実習を行っており、2005（平成17）年度には13名の学生が参加したという。

以上のように「ボランティア学科」のカリキュラムは、福祉の専門職としての基礎を身につけるとともに、福祉や国際協力の現場でボランティア活動を創造・実践し、コーディネーターのための専門知識や技術、さらにボランティアの理念などを修得できるよう各科目が配置されている。

### （3）学生について

2004（平成16）年3月に「ボランティア学科」の第1期生を輩出した。95%の卒業生が希望の地域や領域へと就職し、就職率は高い。業種は社会福祉法人などの福祉関係が75%を占めるが、コーディネーターとして地球環境保全活動や社会福祉活動、青少年教育活動などの社会貢献活動を活発に行っている企業への就職も果たしている。1期生は学年進行のなかで学生の意識が大きく変化し、国際連合大学にて研究発表をするなど積極的な学びの姿がみられたという。

しかし受験志願者の点で言えば、「ボランティア学科」新設時には高倍率だったものの、翌年の全世界を震撼させた9・11事件以降、受験応募者数は激減した。特に女子学生の割合が大幅に減少したという。国際協力や国際協力実習などに対する受験生およびその保護者の不安が高くなったためと考えられる。受験応募者減少と同時に、学生の意識にも二極化がみられるようになった。

### （4）地域との関わり

「ボランティア学科」は地元の高梁栄町商店街の空き店舗を活用して、先人からの遊びを次世代に伝承する「手づくり遊び教室」、委託販売形式のボックス型フリーマーケット「ラーデン広場」、子育てに奮闘する父母らを支える「にこにこひろば」などの事業を毎月1回のペースで開催した。回を追うごとに参加者が増え、商店街関係者が戸惑うほどの盛況ぶりであったという<sup>5)</sup>。こうした実践活動は後述する「センター」の活動に組み込まれていくが、「本当の意味のボランティアを学ぶには、地域に根差した実践学習が不可欠」であることを改めて認識させられた活動であった<sup>6)</sup>。

## 3. 吉備国際大学ボランティアセンター

### （1）「センター」設立の背景

阪神・淡路大震災が「ボランティア元年」といわれ、被災地でのボランティア活動の重要度に対する認識を飛躍的に高めたことは先に記したとおりである。

吉備国際大学においてもボランティア活動はさかんに行われた。2000（平成12）年10月に発生した鳥取西部地震の際は、鳥取県日野町を中心に学生延べ55人、教員延べ19人が5日間にわたり積極的な支援活動を行った。日常的なボランティア活動としては、前述したように「ボランティア学科」の商工会議所との連携による「手づくり遊び教室」やゼミなどの教員を中心とした学生グループによる市内の環境美化、施設訪問、学童保育への支援など様々な活動が展開された。さらに約60人も部員を抱えたボランティア部は学内最大の部となり、高齢者や児童に対する支援、地域や施設が開催する各種イベントへの参加協力など活発な活動が成果をあげた。

こうしたボランティア活動をさらに支援し発展させるためには、学内や地域からのニーズを的確に把握できるシステムや各活動の連絡調整など、学部や学科を超えた全学的なボランティア活動を一元化する組織づくりが必要である。そこでさまざまな諸課題を、包括的に対応する大学ボランティ

アセンターの設置を求める声が強まり、「センター」は設置されたのである<sup>7)</sup>。

(2) センターの組織体制

吉備国際大学のボランティア「センター」は、高粱学園ボランティアセンターの組織の一部であり、各組織が災害復興支援・地域貢献・国際貢献・障害学生支援を4つのセクションとして地域に密着した特色あるボランティア活動を目指している(図1)。各セクションでは教職員のなかから「セクション長」が選ばれ、その要となり活動している。

「センター」は事務局として専任の職員2名が在職し、月曜日から金曜日までの朝9時から夕方5時までが開設時間である。ここでは現在30名ほどの学生スタッフがボランティアの斡旋・紹介や相談などに応じ、ボランティア活動をするにあたっての心得や注意、スキルをあげるための人材養成などの活動をしている。また、年3回程度発行する広報誌のために、取材や編集会議などの仕事もある<sup>8)</sup>。学生そして教職員は、ともにセンタースタッフとして「ボランティアセンターを盛り上げて行き、センターを多くの方に利用していただけるように」とひとつの目標のもと力を合わせて活動している<sup>9)</sup>。つまり「センター」は学生と教職員との協働によって運営されているのである。

(3) 「センター」の活動

「センター」の活動は大きく災害復興支援・地域貢献・国際貢献・障害学生支援の4つのセクションに分かれているが、本報告では地域貢献に絞って報告したい。

「センター」では従来から地域貢献活動として、地元の栄町商店街への活動支援を実施してきた。先に紹介した「手づくり遊び教室」、「ラーデン広場」、「にこにこ・ひろば」のほか、育児を中心とした家族の生活に関する多様な相談に応じ、育児支援を行う「家族福祉相談室」がある。このなかでも特に「手づくり遊び教室」は昨年5年目を迎え、地域ぐるみの子育てが重視されるなか、子

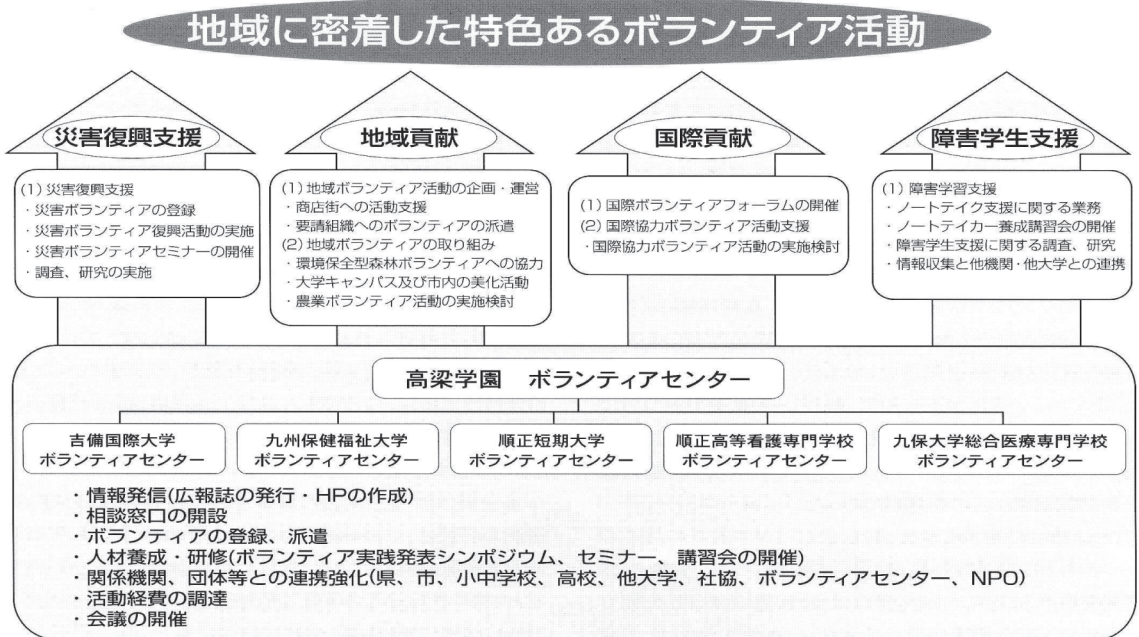


図1. ボランティアセンターの目指す形

出典：高粱学園ボランティアセンター「高粱学園ボランティアセンター通信」第1号，2005年，3頁。

どもたちの憩いの場、学生たちの社会経験の場になると同時に、商店街のにぎわい創出にも一役買いか高く評価されている<sup>10)</sup>。また障害者施設などへのボランティアの派遣なども常時実施している。

さらに2005（平成17）年度より新たに環境活動に踏み込み、高梁市有漢町で「森林ボランティア活動」を始めた。この活動は現在問題となっている農村社会の抱える高齢化などの理由から、手入れが進まない森林を学生ボランティアの協力で活性化させることを目的としている。受け入れ先である高梁地方森林組合は「学生ボランティアは明るい希望だ」と期待を寄せ、参加した学生側にもそれぞれ得るものがあつたという。森林組合や地域住人、そして森林の持つ機能回復がもたらす高梁川下流住民の生活の安定など、森林ボランティア活動のもたらす影響が想像以上に大きいと実感させられたという<sup>11)</sup>。

そのほかにも、地域住民に対するボランティア意識の向上に向けた取り組みとして、「災害ボランティアセミナー」や「国際ボランティアフォーラム」といった講演会を無料で地域住民に開いている。

#### 4. 吉備国際大学から学ぶ点

ここでは、鳥取大学における学生たちの自主的なボランティア組織形成を支援するための施策を、先進事例から検討するために「吉備国際大学社会福祉学部福祉ボランティア学科」と「吉備国際大学ボランティアセンター」を視察・ヒアリング調査した結果をまとめてきた。ボランティア活動を支援することにおいて先進的な経験を有する吉備国際大学から学ぶべき点は多数あつたが、3点にまとめて報告を終えたい。

第1点は、基本的な前提として、「ボランティアは強制されるべきではなくその自発性が尊重される条件づくりがなされるべきである」ということである<sup>12)</sup>。そもそもボランティア活動は自発性・非営利性・公共性・先駆性の要素を合わせもつた活動である。大学において教科に組み込まれたり、あるいは何らかの権威によって義務化や必須化された活動は、自主性・自発性を趣旨とするボランティア活動とは区別されるべきである。しかし、大学の地域社会への貢献に着目したとき、学生のボランティア体験と授業を結びつけることによって学習効果を高めようとした「サービス・ラーニング」がアメリカを中心に浸透している。アメリカにおけるサービス・ラーニングの定義は多様であるが、岡本仁宏は注目すべき点として以下の点をあげている。第1に学習に重点を置きながら教育実践のなかに周到に位置づけられている点、第2にコミュニティへの実効的なサービスを提供することが要請されている点、第3にコミュニティサービスとして社会参加・貢献が明確に意図されている点、第4にその過程で学生の知見を実践に応用し生かしていくことが意図されている点である<sup>13)</sup>。個々の学生にとっては、サービス・ラーニングは自発的ではない場合もある。その是非をめぐって議論が分かれるところではあるけれども、問題はボランティアか否かではなく、むしろ、「社会貢献活動をそれぞれの教育機関がどのように捉えどのようにその教育のなかに位置づけるか」である<sup>14)</sup>。すなわち、明確に大学が大学組織の使命として社会貢献を掲げ、その教育活動の一環として取り組む姿勢が学生の自発性を促す要因となるであろう。

第2点は、学生側の環境整備として、やはりボランティアセンターなどを大学の地域社会へ対応するひとつの場として機能させる必要がある。吉備国際大学では、大学ボランティアセンターが学生ボランティア活動支援の機能を果たすだけでなく、学術研究、人材養成・研修、情報収集・提供、啓発広報の機能をも担っていた。

第3点は大学生の行うボランティア活動であるがゆえに、大学生らしい知識や技能を習得し活用

できることが重要である。したがって、ボランティア活動以前にそのための教育や訓練が必要となる。これに関しては、本プロジェクトの継続、そして普遍的な教育プログラムの開発が急がれる。

### Ⅲ．本事業参加学生に対する質問紙調査

#### 1. 調査1

##### (1) 方法

##### 1) 実施期日及び回収率

2005年11月

・質問紙の回収率は、87% (受講生36名のうち32名) であった。

##### 2) 質問紙の構成

質問紙は、12項目で構成した。その内訳は、授業に関わる項目(4項目)、イベント当日に関わる項目(5項目)、イベント終了後のボランティアへの意識に関わる項目(2項目)、ものづくりへの意識に関わる項目(1項目)。問は、「いいえ1～はい5」の5件法である。さらに、ものづくりの意義の理由は、自由記述項目(1項目)である。

また、これら12の質問項目は、本授業で目標とした獲得させたい力、情意、観を問う項目で構成している。その内訳は、技能(③)、工夫する力(④)、コミュニケーション力(⑥,⑦)、指導力とイメージ(⑧,⑨)、作業段取りの意識(⑤)、自信、興味(①)、意欲(②,⑩,⑪)、ものづくり観(⑫)の意識である。( )内の数字は項目番号を示す。

##### 3) 解析方法

①から⑫の12項目は、平均値を算出した。また⑬の自由記述は、キーワードから一文をカテゴリ分けし、頻度を求めた。

##### (2) 結果及び考察

##### 1) 授業への自己評価・イベントへの取り組み意識・今後のイベントへの意識、ものづくりへの意義の分析

授業に関わる項目(4)、技能祭当日にかかる項目(5)、技能祭の終了後の取り組みに関わる項目(2)、ものづくりへの意識に関わる項目(1)の全項目の平均値をみると、いずれも3以上であった。このことから、受講者は、本授業を肯定的に捉えているといえる。

特に、4以上を示した事前準備項目「技能の獲得(③4.63)、事前練習(⑤4.63)の重要な役割、つくりかたの工夫(④4.19)、また当日の取り組み項目「学生同士のコミュニケーション(⑦4.63)、子・親のコミュニケーション(⑥4.44)」は、高い効力感を抱いていることが分かった。また、受講者は授業にも意欲を持って出席(②4.56)し、この授業は、ものづくりへの興味を一層高め(①4.38)、ものづくりの大切さを理解させた(⑫4.38)といえる。さらに、今後において遊びやものづくりの指導への意欲(⑩4.00)を高めていることが分かった。

一方、イベントを終えた後の、「指導への自信(3.75)、思い通りの指導(3.28)、自主的な企画への意欲(3.25)」は、肯定的に自己評価しているが、平均値4を下回っていた。これは、事前には十分な準備をしてきたが、当日には想定外の事が起き、対応したと考えられる。確固としてマニュアルがあるわけではなく、適宜その場で臨機応変に対応する事が求められることから、困難性を感じたものと推察した。

実際、受講者の当日の感想文をみると、子どもにどの程度の言葉がけや具体的補助をすべきか、

表2. 質問項目と平均値

変数名	平均値
③つくりかたを習得した	4.63
⑤事前練習は役立った	4.63
⑦学生同士コミュニケーションがとれた	4.63
②意欲的に授業に出席	4.56
⑥子・親とコミュニケーションがとれた	4.44
①授業がものづくりの興味を高めた	4.38
⑫ものづくりの大切への理解	4.38
④つくりかたを工夫した	4.19
⑪再度ものづくりや遊びの指導への意欲	4.00
⑨遊びやものづくりの指導への自信	3.75
⑧思った通りの指導が出来た	3.28
⑩自主的に企画し実行への意欲	3.25

学年齢に応じてどのような説明が適切か、また親に対して子どもにさせることを待ってもらえるかなどが述べられていることから分かる。

以上のように、本科目は、目標とする技能、工夫する力、コミュニケーション力、作業段取りの意識、自信、興味、意欲、ものづくり観を効果的に高めたといえる。しかし、指導力とイメージについては、授業のカリキュラムの改善を図る必要があるといえ、今後の課題といえよう。

## 2) 子どもがものづくりをする意義の自由記述の分析

このような事前の準備、当日のイベントを終えて学生がものづくりについて如何に意識しているか、自由記述「子どもたちがものづくりをする意義はどのようなところにあるか」の回答を分析した。方法は、キーワードから一文をカテゴリ分けし、頻度を求めた。

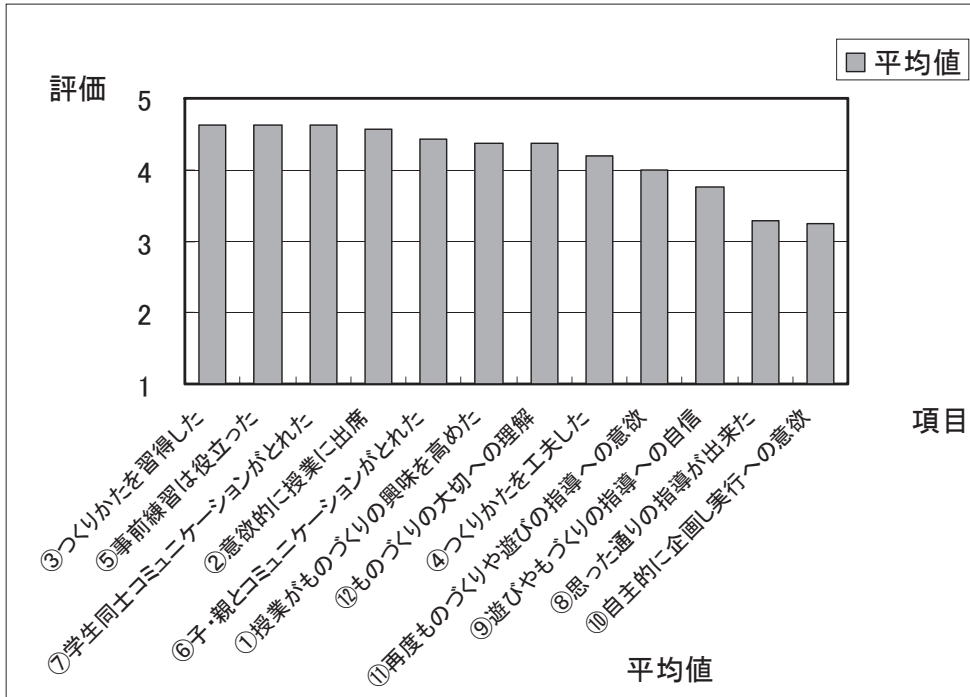
64文から64のキーワードを抽出した。カテゴリ分けした結果は、図3に示した。

上位7カテゴリをみると、最も高い比率は、「考える、工夫、知恵、発想力、想像力」を高める思考・認知に関わるカテゴリであり、24%を示した。続いて「楽しさ、喜び」を得るは15%。「達成感、充実感、体感」を得るは13%。「ものを大切にする、愛着」ができるは11%。「コミュニケーション」が出来るは6%。「工具操作能力」を得るは5%。そして、「大変さ」は3%であった。

「工具操作能力」を得たカテゴリよりも「考える、工夫、知恵、発想力、想像力」を得るカテゴリの方が高かった。これは、今回の授業が、道具を合理的に操作し、製作することを重視する以上に、作業前の道具や材料を準備する過程を重視した授業展開によると考える。

具体的な授業展開は次の通りである。まず、授業の最初に、教員が完成した作品を提示し実演する。次に、受講者には作業段取り表が渡され、完成に必要なとされる工具、材料、作業手順をその作業段取り表に記入する。そして、受講者は工具、材料作業を準備し、自分の手順に沿って、作業を進めるのである。また、手順や準備に間違いがあれば訂正をして作業を進めるのである。イベント前の準備では、ブース毎に、大量に、安全に、かつ短時間に、ものが作れる治具作りを行った。さらに、担当者が相談をし、必要とする材料や工具の種類と数を記入した注文票を提出し、発注するとともに、合理的に作業を進めるための手引き書の作成も行った。

以上のように、ものづくりの意義で「考える、工夫」の比率が最も高かった理由としては、作業



N = 32

図2. 質問項目と平均値

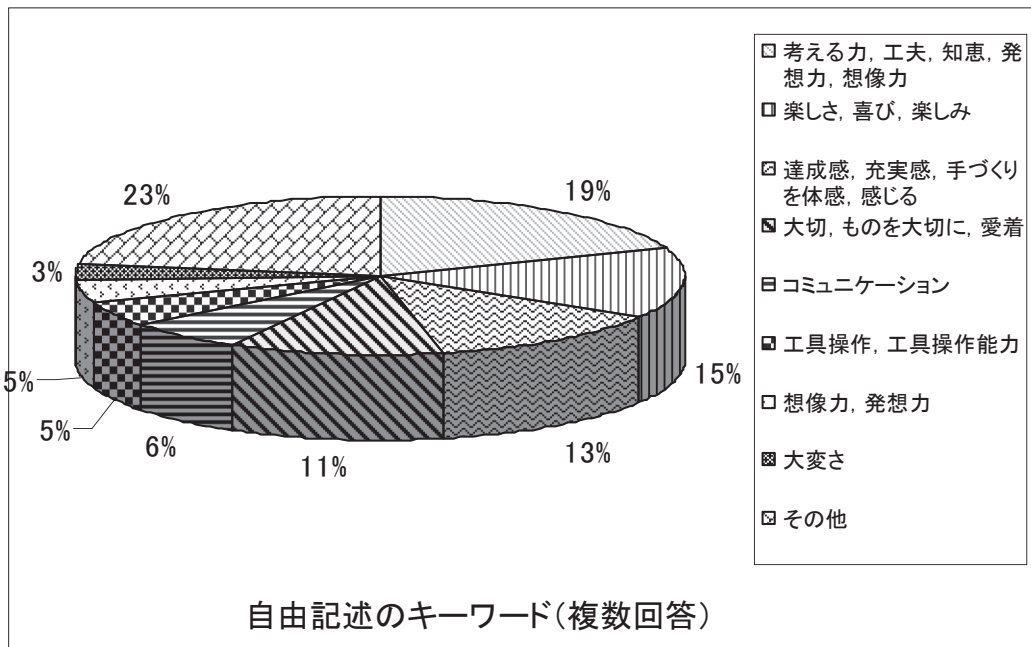


図3. 子どもたちがものづくりをする意義

前準備を重視し、合理的・効率的に作業を進める手順や工夫（治具づくり）を行い、「考える」ことを重視してきた授業展開の教育的効果と考えられる。最初、受講生は、この授業展開に対し戸惑がみられた。学校教育における学習経験では、教師が道具や材料を準備し、さらには手順までもが決められたものづくりを経験してきている。単に手を動かせばよかったことから、自らが準備しないと作業が進まないことに意識を転換させなければならなかったのである。従来のものでないものづくりでは考えられなかったことが突きつけられ、他者依存的な学習意識から脱却せざるをえなかったと考える。このことは、毎回提出する感想文の中で、多くの受講者が述べており、理解できる。

次に、受講者らがものづくりを体験し、さらに子どもたちにもものづくりを教える役割の過程で、ものづくりが内包する「楽しさ」や「充実感」、そして「大変さ」を実感したと考えられる。また、体験の過程で、ものを大切にする心なども養われることを意識したと考えられる。

## 2. 調査2

### (1) 方法

#### 1) 実施期日及び回収率

2005年12月13日

・質問紙の回収率は、97%（受講生36名のうち35名）であった。

#### 2) 質問紙の構成

質問紙は選択回答及び自由記述回答を組み合わせる14項目で構成した（表3）。その内訳は、I ボランティアに関わる項目（4項目）、II 授業に関わる項目（10項目）である。これら14の質問項目のうち、I ボランティアに関わる項目についての問は、ボランティア団体の所属を除き（①）、すべて自由記述回答とした（②、③、④）。II 授業に関わる項目のうち、4項目（⑤、⑦、⑨、⑪）は「いいえ1～はい5」の5件法で、それぞれに対応する理由を記述するようにした（⑥、⑧、⑩、⑫）。また授業後の学生自身の変化（⑬）、授業の意義を問う項目（⑭）は、自由記述回答とした。

表3. 質問項目

I ボランティアについて
ボランティア団体に所属しているか①。
1年間にボランティア活動をする回数②。
ボランティア活動をする際に、最も大切なこと③。
③の理由④。
II 「子どもの生活とものづくり」の授業を終えて
授業からものづくりや遊びに興味をもったか⑤。
⑤の理由⑥。
技能祭のような企画を自主的にやってみたいか⑦。
⑦の理由⑧。
またものづくりや遊びなどの指導をやってみたいか⑨。
⑨の理由⑩。
子どもたちがものづくりをする大切さがよくわかったか⑪。
⑪の理由⑫。
授業からあなた自身が最も変わったと思うことは何か⑬。
授業を受けてあなたが最もよかったと思うことは何か⑭。

表4. ボランティア団体の所属状況

所属している	4 (人)
所属していない	31 (人)

表5. 年間のボランティア活動の回数

回数 (回)	人数 (人)	割合 (%)
0	14	47
0.5~2	11	37
2.5~4	1	3
4.5~10	4	13

## 3) 解析方法

①, ②, ⑤, ⑦, ⑨, ⑪の6項目はそれぞれ単純集計をした。③, ④, ⑥, ⑧, ⑩, ⑫, ⑬, ⑭の自由記述は、キーワードから1文をカテゴリ分けし、頻度を求めた。

## (2) 結果及び考察

## 1) ボランティアに対する意識

本科目を受講した学生のうち、ボランティア団体に属していた者は4名であった(表4)。ボランティア団体の所属に関わらず、年間のボランティア活動の頻度を尋ねたところ、活動が10回に達する学生がいる一方、大方の学生は年間にまったくボランティア活動をするのではなく、平均1.6回という結果であった(表5)。ちなみに本調査において、年間5回以上ボランティア活動をする学生は、全員ボランティア団体に属していた。これらから本科目の受講生の大半は、ボランティア活動に対して積極的であるとは言い難い。

このような学生たちが、ボランティア活動をどのように理解しているのか、自由記述「ボランティア活動を行う際に、最も大切なことは何か」の回答を分析した。キーワードから1文をカテゴリ分

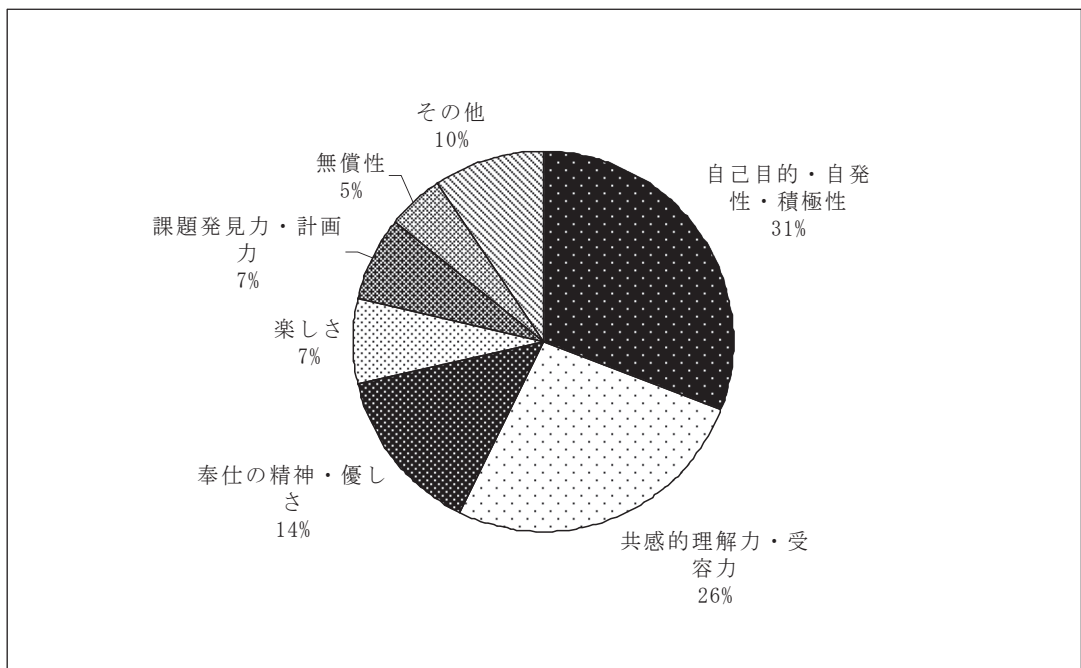


図4. ボランティア活動を行う際、最も大切なこと



けし、頻度を求めた。ここでは36文から42のキーワードを抽出した。カテゴリ分けした結果は、図4に示した。

上位6カテゴリをみると、最も高い比率のカテゴリは「自分のため、自発性、積極性」といったボランティア活動の基本的要素ともいえるものであり、全体の31%を示した。この理由として、「いやいやするのは自分にとっても、まわりの人にとってもよくないと思うから」、「強制されるボランティアでは意味がない。自ら進んでやらなければされる側も気持ち悪い」や「ボランティア活動＝無報酬なので、目的や目標意識が明確でなければ質の高い活動をするのができないし、また自分への価値あるリターンも期待できないと思うから」などがあげられた。続いて「他者を理解する力、傾聴力、協調性」などの共感的理解力や受容力を示すものが26%であった。理由には「相手の身になるのが一番だと思うから」、「あくまでもボランティアの主体は相手だと思うから」、「ボランティア活動は、周りの人と協力し合わない活動ができないから」などがあげられた。次に「奉仕の精神・優しさ」などとボランティア活動を奉仕活動と捉えたものが14%であった。この理由として「自分のためだけだったら、ボランティアとはいえない」、「見返りを求めずに、本当に人のために思っていることがボランティアだと思うから」などが示された。また「奉仕の精神・優しさ」と類似したカテゴリ「無償性」が5%を示し、「利益を求めようとしてしまうと、ボランティアとしての本質を失っていると思うから」と、「奉仕の精神・優しさ」の理由とほぼ一致した。その他には、「楽しさ」を得ることが7%、また自分でやることを見つけるや計画を立てるといった「課題発見力・計画力」も同じく7%を占めた。ボランティア活動においては、楽しみながらも、事前の準備や段取りが重要であることに気づいたものと思われる。

## 2) 「子どもの生活とものづくり」の授業を終えた学生の意識

### ① ものづくりや遊びへの興味・自主的な企画運営・ものづくりや遊びの指導・ものづくりへの理解の分析

Ⅱ授業に関わる項目(10項目)のうち4項目(⑤, ⑦, ⑨, ⑪)は「いいえ1～はい5」の5件法を用いた。「いいえ」を1点、「どちらかといえばいいえ」を2点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばはい」を4点、「はい」を5点とし、平均値と標準偏差を算出した(表6)。この結果、質問⑤「この授業からものづくりや遊びに興味をもった」、質問⑨「またものづくりや遊びなどの指導をやってみたい」、質問⑪「子どもたちがものづくりをする大切さがよくわかった」において、3以上の評価を得た(表6, 図5・7・8)。特に、⑪のものづくりへの理解の平均値は高く、本授業がものづくりの大切さを理解させたのに有効であったといえる。同時に、学生たちのものづくりや遊びへの興味を喚起させ(⑤3.66)、今後において遊びやものづくりの指導への意欲(⑨3.83)を高めたといえるであろう。

しかし一方、質問⑦「技能祭のような企画を自主的にやってみたい」の自主的な企画運営に関しては平均2.77という低い値を示した。ものづくりや遊びに対する興味・関心、重要性の理解、また

表6. 「子どもの生活とものづくり」授業後の学生の意識分析

変数名	平均値	標準偏差
⑤ものづくりや遊びへの興味	3.66	1.35
⑦自主的な企画運営	2.77	1.17
⑨ものづくりや遊びの指導	3.83	1.18
⑪ものづくりへの理解	4.31	0.76

N=35

その指導への意欲はあるものの、自らが自主的にボランティア団体を組織し、実行することに対しては慎重であることがうかがえる。

こういった点は今後の大きな課題であろう。以下、上記4項目に対応する自由記述の理由から、

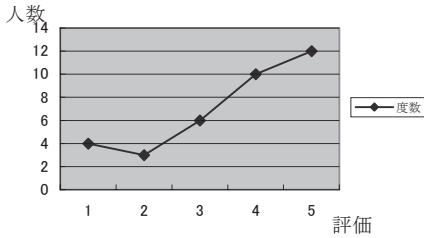


図5. この授業からものづくりや遊びに興味をもった

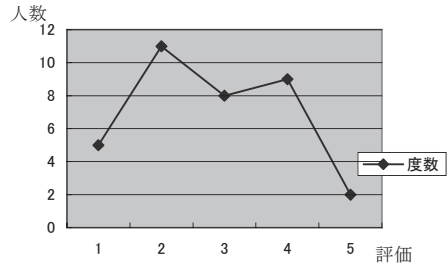


図6. 技能祭のような企画を自主的にやってみよう

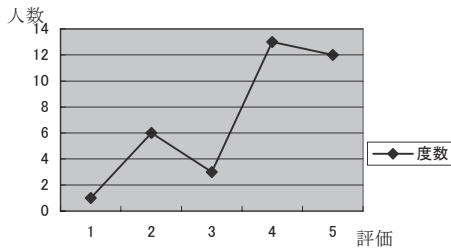


図7. またものづくりや遊びなどの指導をやってみよう

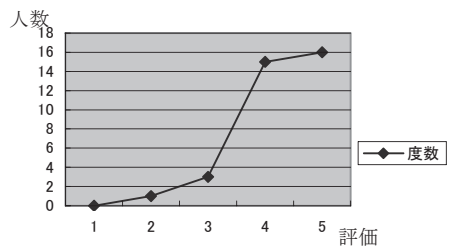


図8. 子どもたちがものづくりをする大切さがよくわかった

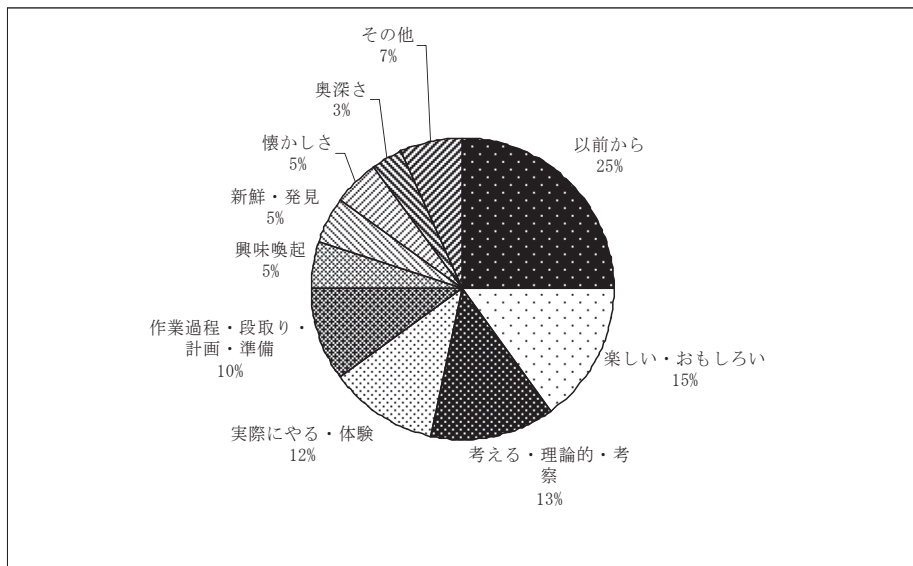


図9. この授業からものづくりや遊びに興味をもった理由

ものづくりの技術を習得して、ボランティア活動を行える人材養成のためのプログラム開発への方策をさぐりたい。

② ものづくりや遊びへの興味・自主的な企画運営・ものづくりや遊びの指導・ものづくりへの理解の自由記述分析

図9は、質問⑤「この授業からものづくりや遊びに興味をもった」の理由44文から60のキーワードを抽出したものを示した図である。「以前から興味があった」を示すカテゴリが全体の25%を占めたが、「楽しい・おもしろい」は15%、「考える・理論的・考察」といったカテゴリは13%、「実際にやる・体験」は12%、「作業過程・段取り・計画・準備」が10%であった。これは先にも示したように、本授業がものづくりを重視する以上に、作業前の道具や材料を準備する過程を重視した授業展開による教育的効果と考えられる。したがって、「ものづくりをする上で、そのものを作る準備、考察などを行っているとしても楽しくなってくる」、「ものづくりの奥の深さが分かったからです。ものづくりは段取りの8割という話を聞いて、私はあまり計画や段取りを立てるのが面倒で好きではなかったのですが、今後積極的に遊びの計画・準備など立ててみたいと思いました」、「今までは説明書などがありつくっていたが、今回は自分で考えてつくっていったので新鮮な感じがした」などの回答を得ることができたと思われる。

次に質問⑦「技能祭のような企画を自主的にやってみたい」の理由については、その評価の高低によって低群、中群、高群の3群に分類して、同様に1文からキーワードを抽出して分析した。表7は3群の人数分布を示したものである。

図10は低群の理由を、16文から25のキーワードを抽出しカテゴリ分けした結果である。「技能祭のような企画を自主的にやってみたい」に対して、「いいえ」や「どちらかといえばいいえ」と否定的に答えた理由に「大変・めんどくさい・しんどい」が最も多く28%を示した。次に「人の企画ならば・授業ならば・参加型ならば」が24%であった。自ら企画し、音頭をとるのは「大変・めん

表7. 「技能祭のような企画を自主的にやってみたい」各群の人数分布

評価	平均点	人数（人）
低群	1.7	16
中群	3	8
高群	4.2	11

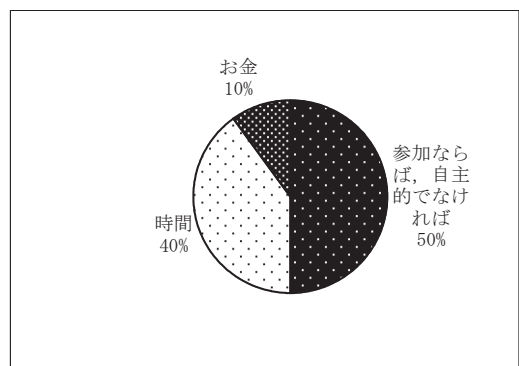
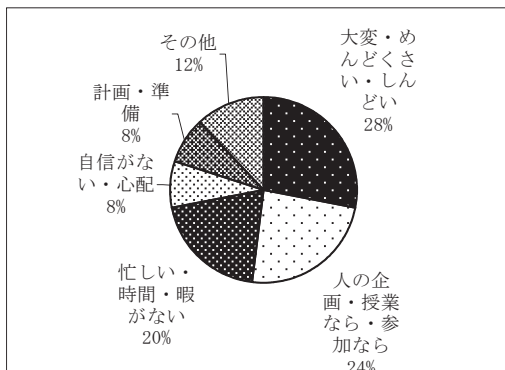


図10. 低群の理由

図11. 中群の理由

どくさい・しんどい」ので、人の企画や授業の一環としてならば参加してもよい、というところであろう。また「忙しい・時間・暇がない」は20%、「自信がない・心配」が8%であった。「大変・めんどくさい・しんどい」の具体的な事項は「計画・準備」であり、これが同じく8%を示した。

図11は中群の理由をカテゴリ分けしたものである。中群では6文から10のキーワードを抽出した。中群は、参加はしたいけれども、自主的に企画することには消極的である姿勢がうかがえた。それを示す「参加ならば・自主的でなければ」が半数であった。次に「時間がない」が40%、自らが主催者になると材料費などの「お金がかかる」が10%であった。低群と同様、「自主的でなければ参加したい」という学生が多いけれども、低群の示した「大変・めんどくさい・しんどい」、「自信がない・心配」などの心理的な理由はまったくなく、時間や金といった物理的な理由をあげている。

図12は高群の理由を、13文から22のキーワードを抽出しカテゴリ分けした結果である。「技能祭のような企画を自主的にやってみたい」に対して、「はい」や「どちらかといえばはい」と肯定的に答えた理由に「子どもとのかかわり・コミュニケーション」が27%と最も高い比率であった。続いて「楽しい・喜び・おもしろい」は23%であり、「自分の学び・自分の成長」が18%、「達成感・充実感」を得るが9%、同比率に「アイデア・企画」があがった。

先にも述べたように、本授業では作業前準備に注目し、合理的・効率的に作業を進める手順や工夫を行い、考えることを重視した授業展開を意識した。教師が道具や材料を準備し、さらには手順までもが決められたものづくりを経験してきた学生たちにとって、自らが準備や計画をしないと作業が進まないという、従来のものであったことが突きつけられ、他者依存的な学習意識から脱却せざるをえなかった。このことは、受講者が毎回提出する感想文のなかにも多くふれられていた。また、前質問項目「この授業からものづくりや遊びに興味をもった」の理由で「考える・理論的・考察」といったカテゴリや「作業過程・段取り・計画・準備」カテゴリが上位を占めたことから、準備から計画そして作業段階において、学生自らが主体的に考えたことがものづ

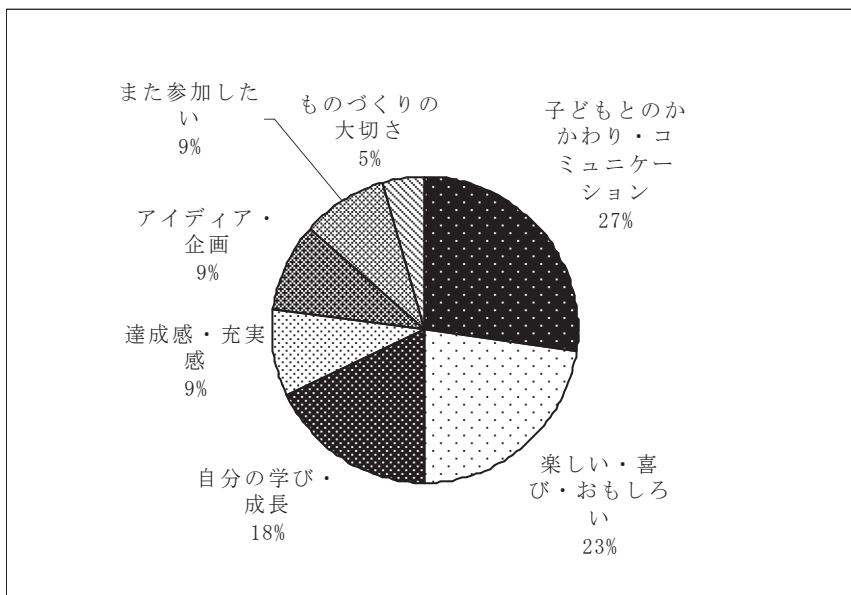


図 12. 高群の理由

表8. 「またものづくりや遊びなどの指導をやってみたい」各群の人数分布

評価	平均点	人数（人）
低群	2.2	10
高群	4.5	25

くりへの興味を喚起したことは明らかであろう。

しかし、いざ自主的な行動となると、低群・中群を中心とした学生は慎重であった。この要因のひとつとして、他者との関わりやコミュニケーション力が大きく影響すると推測される。低群では「大変・めんどさい・しんどい」といったことが高群では「楽しい・喜び・おもしろい」と感じ、さらには「自分の学び・自己成長」とプラスに志向している。決定的なのは低群が「計画・準備」といった準備段階を「大変・めんどくさい・しんどい」としたのに対して、高群ではこうした「アイデア・企画」を学生自ら行うことが「達成感・充実感」につながり喜びとなったとしている点である。同事項に対して低群ではマイナスに感じ、高群ではプラスに感じているのである。この違いこそが、自主的な行動へつながるひとつの分岐点となるのではないかと思われる。高群では「大変・めんどくさい・しんどい」感以上に、子どもとの関わりやコミュニケーションを「楽しい・喜び・おもしろい」感として捉えることができ、達成感や充実感、ひいては自己成長といった肯定的な自己尊重感情へと昇華させていると考えられる。したがって、他者依存的な学習意識から自主的な学習意識へと転換させ、さらにこれをわれわれの目的である学生ボランティアの組織にまで到達させるには、その過程に効果的なコミュニケーションや他者との関わりを仕組む必要があると考えられる。具体的には、学生に対するものづくりの指導援助だけではなくして、完成した作品をとおした遊びの指導が重要となろう。そこに、他者理解力や相互調整力などの対人スキル、そして伝達力や表現能力などのプレゼンテーション力を含めた効果的なコミュニケーション力を高めさせるようなプログラムを仕組むことが、低群や中群の自主的な実践力を育むひとつの手がかりとなるのではないかと考えられる。

このことは質問⑨「またものづくりや遊びなどの指導をやってみたい」の理由を、表8のようにその評価の高低によって低群、高群の2群に分類して分析した結果からもいえよう。

図13は「またものづくりや遊びなどの指導をやってみたい」に対し、低い評価を示した学生の理由を、10文から10のキーワードを抽出しカテゴリ分けした結果である。「指導は難しい・自信がない」が50%を示した。続いて「自分のものづくりは楽しい」けれども「指導には興味がない」がそれぞれ10%であった。

一方、高い評価を示した学生の理由を、29文から38のキーワードを抽出しカテゴリ分けした高群の図14では、「楽しい・うれしい・よかった」カテゴリが21%、「子どもとのふれあい・人と接すること・コミュニケーション」が18%、同じく「教えたい・指導したい」18%、「人が喜んでくれる・子どもの喜ぶ顔・子どもの笑顔」16%、「自分の学び・自己成長」が11%、技能祭での自己の指導を反省しさらに意欲を示した「うまく教えるようになりたい」が8%であった。「子どもたちが一所懸命に手を動かして、出来上がったときの笑顔を見て、手伝ってあげられてよかったと感じたから」、「子どもたちと接して、またものづくりを教えたりして喜んでもらったりするのはうれしいから」と言う。

このように「指導は難しい・自信がない」という学生に対して、他者との関わりやコミュニケーションを中心とした何らかの指導援助が必要なことは明らかであろう。しかし、ものづくりの指導

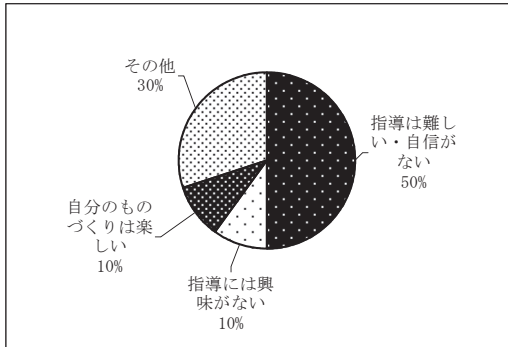


図 13. 低群の理由

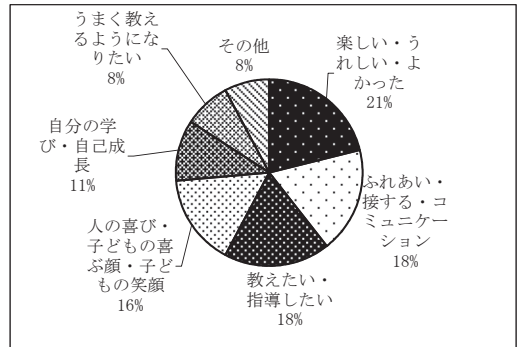


図 14. 高群の理由

援助や完成した作品をとおした遊びの指導などの実践的な側面ばかりでは、ものづくりの技術を習得して、ボランティア活動を行える人材養成のためのプログラムとしては成立し難いといえよう。

図15は、理論面の重要性をよく示している。これは「子どもたちがものづくりをする大切さがよくわかった理由」を、35文から40のキーワードを抽出しカテゴリ分けをしたものである。最も高い比率を示したのは「授業・データなど」の37%であった。本受講生は技能祭終了後、子どもの発達段階に即した最新の研究データに基づいた、子どものものづくりや遊びの意義について理論的に学習をした。その効果が「最後のほうの授業を聞いてみて、子どもがものづくりをする大切さは伝わったから」や「最後のほうの授業で、ものづくりには色々なステップがあり、それが子どもたちの成長に深く関わっていることがわかったから」、「発達段階も絡めて説明していただき、とてもわかり

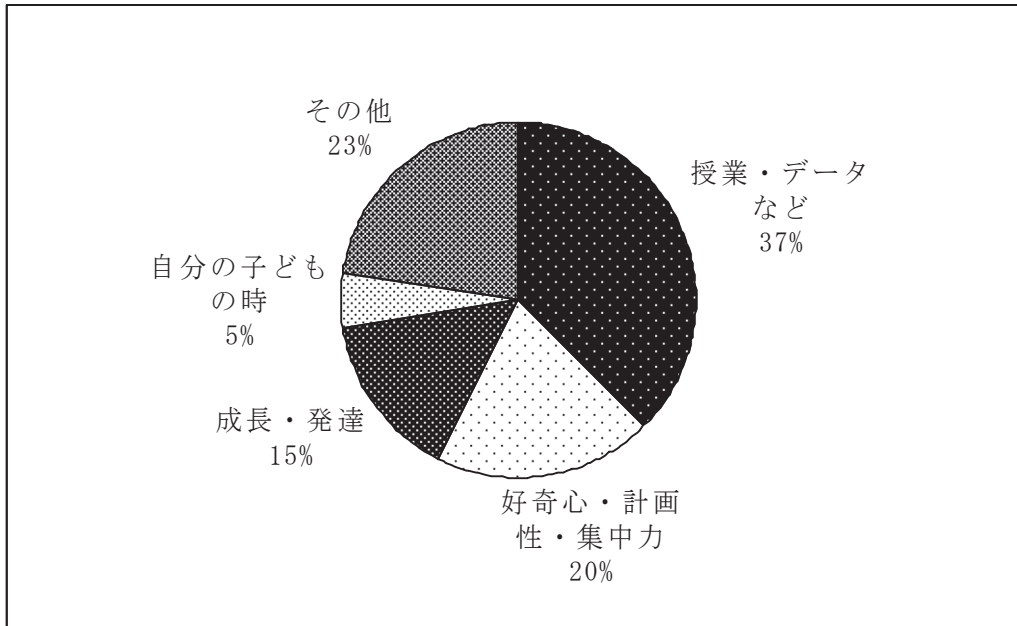


図 15. 子どもたちがものづくりをする大切さがよくわかった理由

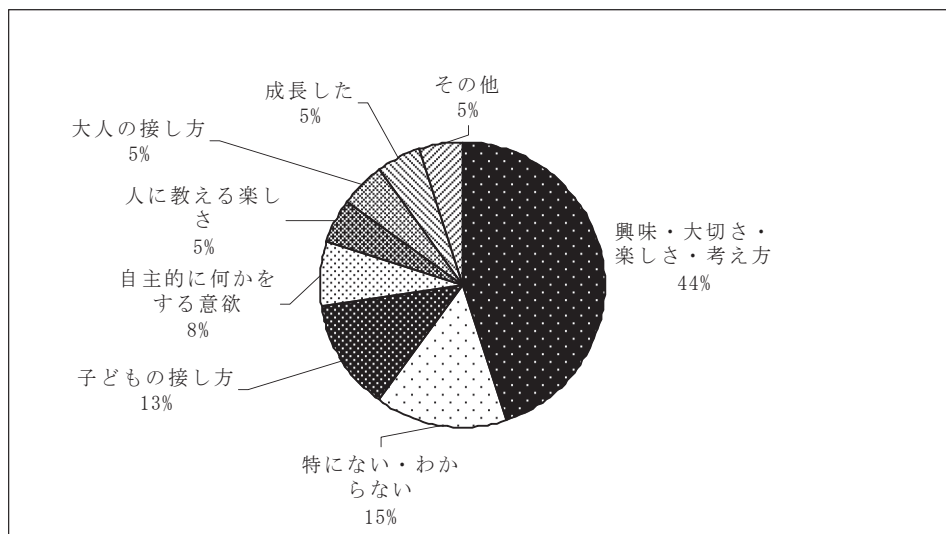


図 16. 授業後の変化

やすかったから」のような回答につながっていると思われる。

本授業では、技能祭の日程から「ものづくり実践から理論へ」という形式をとらざるを得なかった。「実践」から「理論」なのか、「理論」から「実践」なのか、今後は学生からあげられた「今回は実際に作業をすることが多かったので、理論的な部分ではもっと深く知りたい」という「実践」と「理論」の時間配分をも含めた検討が必要と思われる。

### ③ 授業後の学生自身の変化・授業で最もよかったことの自由記述分析

図16は「この従業を受けてあなた自信が最も変わったとおもうことは何ですか」について、自由記述36文から40のキーワードを抽出しカテゴリ分けをしたものである。

上位7カテゴリをみると、最も高い比率は「興味・大切さ・楽しさ・考え方」というものづくりや遊びに対する認識の変化であり、44%を示した。続いて「特にない・わからない」は15%、「子どもの接し方」がわかるようになったが13%、「自主的に何かをする意欲」を得たは8%、「人に教える楽しさ」、「大人の接し方」、「成長した」がそれぞれ5%であった。

「特にない・わからない」が15%を示したものの、本授業はものづくりや遊びへの興味を高め、その大切さを理解させたといえる。受講生のなかには「私自身不器用で普段からもなど作ることはしないのですが、この授業でもものづくりの楽しみなどを学ぶことができ、自分で何か作ってみたくなった」という者もいた。また、ものづくりや遊びの指導をとおして、子どもや大人への接し方に変化がみえてきたと言う。「子どもの心を以前より理解できるようになった」や「子どもたちに話すとき、友達や大人の方々への接触のやり方が変わった」と述べられていた。さらに、本授業は、学生の自主的に何かをする意欲を高めたともいえよう。「自分で計画して何かをするという意欲がわいてきました」、「人に頼るのではなく、自主的に何かをしたり応用を考えたりするようになった」、「何かをする意欲が前よりでてきた気がする」と言う。

次に、図17は「この授業を受けてあなたが最もよかったと思うことは何ですか」について、自由記述41文から40のキーワードを抽出してカテゴリ分けしたものである。

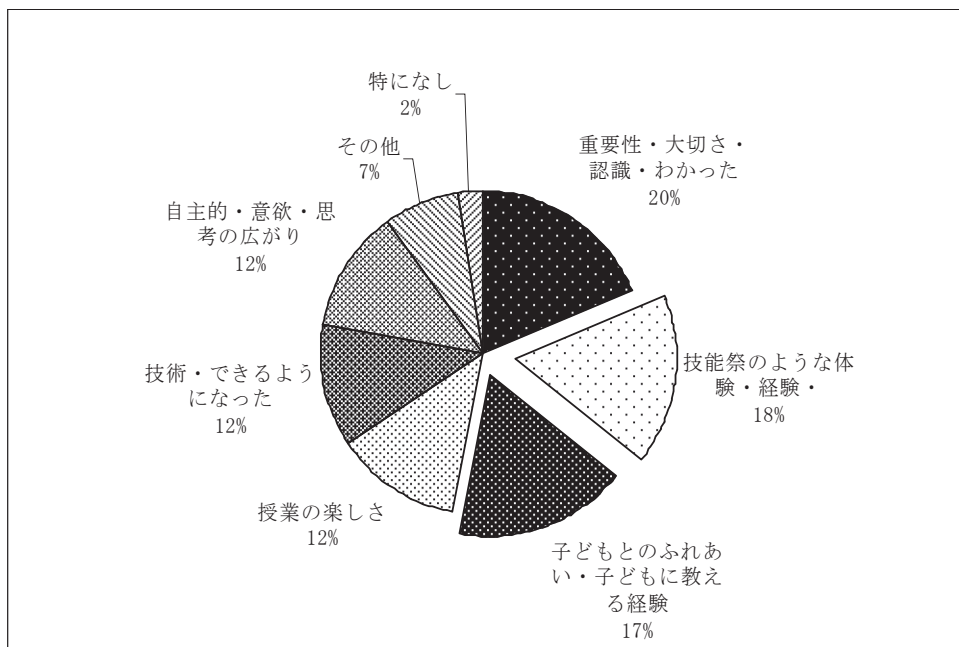


図 17. この授業で最もよかったと思うこと

最も高い比率は、ものづくりや遊びの「重要性・大切さ」がわかった、の20%であった。次に「技能祭のような体験・経験」は18%、「子どもとのふれあい・子どもに教える経験」が17%であった。両カテゴリとも技能祭での体験であるため、合計して35%と考えても差し支えないだろう。しかし、前カテゴリはものづくり、後カテゴリは子どもとのふれあいに重点を置いたものとして、ここではそれぞれに分けて表示した。続いて「授業の楽しさ」、「技術が身に付いた・ものづくりができるようになった」や「自主的・意欲の高まり・思考の広がり」は同比率で12%を示した。

以上より、本授業は受講生にもものづくりや遊びの意義を理解させ、技能祭のような体験をとおして地域子どもたちにもものづくりや遊びの大切さを教えるなかで、技術や意識を効果的に高めたと考えられる。

本研究の中核となる「子どもの生活とものづくりⅡ」の授業は、受講生にもものづくりや遊びの大切さを理解させ、ものづくりや遊びへの興味を喚起させ、さらに今後においてもものづくりや遊びの指導への意欲を高めた。調査1でも報告したように、このなかには、目標とする技能、工夫する力、コミュニケーション力、作業段取りの意識、自信なども含まれ、多くの成果をあげた授業であったといえよう。

しかし、指導力や学生自らが自主的にボランティア団体を組織し、実行することに関しては今後の課題として残された。これに関しては、受講生に対するものづくりだけではなく、完成したものをとおした遊びの指導など、対人スキルやコミュニケーション力をさらに高めさせるようなプログラムを仕組む必要が考えられるし、また、実践面だけではなく、理論面の充実も当然のことながら浮かび上がってきた。授業のカリキュラムの改善を図りながら、継続的な資料の集積が必要と思われる。



### Ⅲ. まとめ

本研究は、地域の子どもたちの成長発達を支援する学生ボランティアを組織し、学生たちが人と関わり、地域貢献し得る力を高めるためのプログラム開発を目指して取り組まれた。そして、学生たちが子どもと関わる手段としてももの製作・利用を重視し、具体的な指導を行った。すなわち、ものを介して子どもたちとコミュニケーションをとれる力を養い、学生たちの教育内容的な学びと子どもや学生同士の関わりを質的な深まりを記録して、それを可能にするプログラム開発のための基礎的な資料の集積を試みたものである。

具体的には、共通教育科目「子どもの生活とものづくりⅡ」（2005年度後期）にリンクさせて、その受講者を中心的な対象として本研究に取り組んだ。本学においてもボランティア活動に熱心に取り組む学生は少なくないが、それ以上に、実際に活動をしていなくても潜在的にはやってみたいとの希望があると考え、しかも、本授業には、子どもとものづくりの双方に興味関心をもつ学生が集まるため、本研究と関連させるのは、授業展開上もむしろ好都合と判断したからである。

今後の「子どもの生活とものづくりⅡ」においては、ボランティアを行える力量をもつ学生の養成を重視しており、すなわち、人と関わる力はもとより、そのための手段としても有効なものづくりを実際に行える具体的な力をつけることを図った。受講生約40名はグループに分かれ、シュート棒、キーホルダー、ひものネクタイなどの製作を経験した。そのうえで、グループごとに製作するブースの担当を決めて、ポリテクセンター鳥取を会場とした技能祭（11月6日）に参加した。その際、作り方の手引き書の作成も行った。

技能祭での経験については、学生たちにその後アンケート調査を行い、その学びの様子、地域貢献力を高める様子をデータ化して読み取れるよう試みた。学生の反応としては、このような活動の意義を認め、ものづくりのおもしろさを自覚化しつつ、一方、子どもに説明することの難しさを改めて認識する声も散見された。同時に、ボランティア活動における事前準備や段取りの重要性に気づいたものと判断できた。このような企画を自ら行っていききたいかとの問いには少々慎重な者もあったが、概して学生の反応は良好であった。

なお、技能祭当日はあいにくの雨模様であったが、学生たちのものづくりのブースには地域の子どもや保護者をはじめ約500名の来場者を迎え盛況であった。主催者側から「これまでは野菜販売のコーナーなどでものを買うとすぐに帰るケースが多かったが、おかげで来場者が技能祭会場にとどまる時間が長くなった」との好意的評価を頂いた。また、その活動の様子は、新聞記者の取材を受け記事として掲載された。

ところで、本研究は授業とリンクさせたことにより、形式的には純粋なボランティア活動とはいえないものとなった。その点への配慮も込めて、学生のボランティア活動を支援することにおいて先進的な経験を有する吉備国際大学ボランティアセンター及び社会福祉学部福祉ボランティア学科（岡山県高梁市）からの聞き取りを行った。ボランティアをコーディネートできる力をもった人材養成を目指す本学科においては、商店街の空き店舗を活用した手作り遊び教室など、盛んなボランティア活動の実態を伺うことができた。

以上の活動により、ボランティア活動は、行う側の善意や意欲のみによって成り立つものでなく、さらに、活動内容を支えるスキルの習得や段取りの構成によってより有効な活動が成立すること、その中で学生の意欲も高まることが明らかとなった。この一連の流れを図式化すれば、次のように

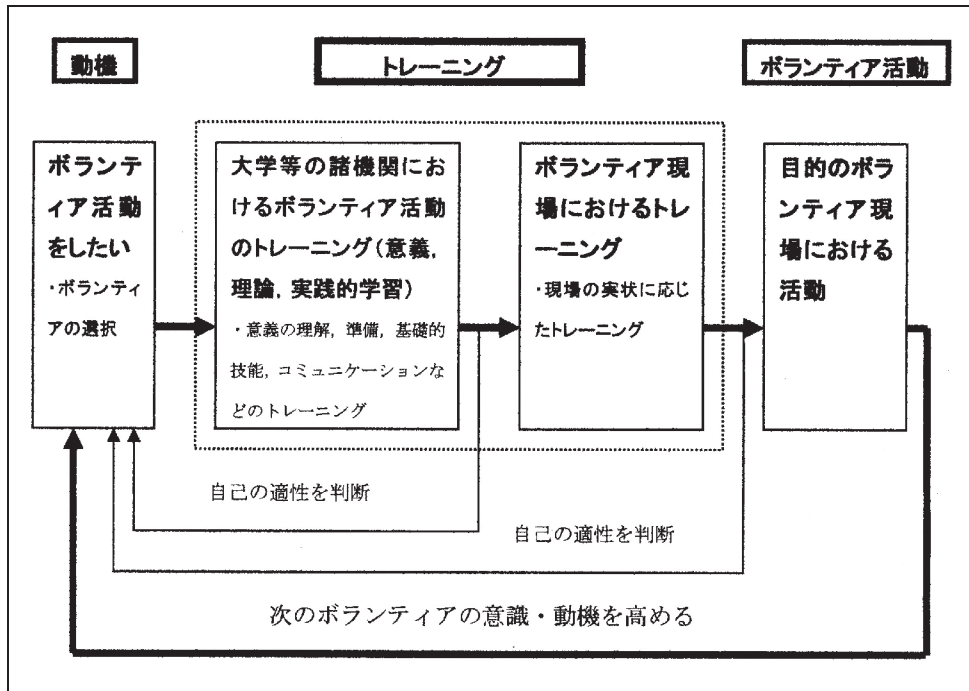


図 18. ボランティア活動モデル図

まとめられる (図18)。そして、それを応援し現実化する役割が大学側にも求められよう。しかし同時に、ここでの経験を踏まえ、学生たちがまさに自らの手で地域のボランティア活動を今後どのように組織化していくのかは残された課題である。今後の動きを見守りつつ、そのような学生ボランティア活動の生起を応援していきたい。

### [追記]

本研究は、平成17年度鳥取大学地域貢献支援事業として、学内助成金を受けて行われた。本論は『平成17年度地域貢献支援事業報告書 “地域貢献力” 養成プログラムの開発』鳥取大学地域学部地域教育学科学習科学講座生活能力論分野、2006年3月を一部修正したものである。なお、本研究の遂行に際しては、工学部ものづくり教育実践センター・長島正明先生にたいへんお世話になった。記して感謝申し上げる。

### [注]

- 1) 吉備国際大学「福祉ボランティア学科の特色」パンフレット。
- 2) 吉備国際大学ボランティアセンター「高梁キャンパスボランティアセンター通信」第5号, 2005年, 2頁。
- 3) 日本ボランティアコーディネーター協会の見解である (<http://www.jvca2001.org/info/index.html>, 2007年5月11日現在)。
- 4) 平成14年7月29日, 中央教育審議会。
- 5) ボランティア学科の取り組みは, 山陽新聞を中心に多数報道された。

- 6) 「福祉ボランティア学科 地域と連携し学習」『山陽新聞』2001年5月8日。
- 7) 塚田健二・竹森康彦・橋本由紀子・山本敦之・末吉秀二・岡崎幸友「ボランティアセンター基本構想に関する提言」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』第7号, 2002年, 191～202頁。
- 8) 吉備国際大学ボランティアセンター広報・啓発部門「吉備国際大学ボランティアセンター ボラ☆セン」第4号, 2004年。
- 9) 注2), 5頁。
- 10) 「『手づくり遊び教室』5年目」『朝日新聞』2005年4月28日。
- 11) 高梁学園ボランティアセンター「高梁学園ボランティアセンター通信」第1号, 2005年, 9頁。
- 12) 岡本仁宏「大学とボランティア—市民社会化の展開の中で—」『大学と学生』第429号, 2000年, 33頁。
- 13) 同上, 31～32頁。
- 14) 同上, 32頁。

(2007年5月11日受付, 2007年5月18日受理)